

【熊本公德会賞】

ぼくのあたりまえ

球磨村立渡小学校 4年 木屋 蓮

ぼくのあたりまえの生活は、とつぜん、うばわれた。友だちと一しょに、歩いて学校に行けること、学校があたりまえにあること、ランドセルがからえること、教室で授業をうけれるということ。そして、友だちと会えるということ。そんな、あたりまえな日常が、真っ黒な雨雲に一しゅんでうばわれた。雲、雨、川、自然がこんなに怖いものだとは考えもしなかった。

よその水害をテレビで見たことはあったけど、本当は自分が体けんしなくなかった。学校もなくなった。家もなくなった。ぼくたちは、ばあちゃんの家泊まることになった。ちがう学校に行くことにもなった。ぼくは今までの学校に行きたかった。みんなにも会いたかった。

その学校の子たちは、ぼくに水害のことをわすれさせてくれるくらい、明るく、やさしく、むかえ入れてくれた。

そして、仮設住宅をてい供してもらい、ぼくたちのあたりまえの日常に少しでも近づけようと、いろんな方々に支えん物資をたくさんもらった。たくさん支えんしてもらった。だんだんもとの生活にもどってきた。今の生活はとても楽しい。友だちと毎日会えて、毎日みんなに「おはよう。」と言えることが幸せなことだとはじめて知った。

この世の中、たくさんの災害とつき合っていかなければならない。ぼくは、今回の水害がきっかけで、助け合うことがとても大切なことだと学んだ。ぼくが支えんできるようになって、多くの人の心をたすけられるようにがんばりたい。水害にあい、つらいこともたくさんあったけど、ぼくは今、いろいろな意味でこのような体けんができてよかったと思っている。